図書館員のひみつの本棚　第４９回

　ゴールデンウィークも明け、初夏の日差しが明るい毎日となりましたね。お休みの間にどこかに出かけた方も多いのではないでしょうか？現在では旅の間の待ち時間には、携帯電話や ipod などで皆さん時間をつぶしているかもしれませんが、昔はそんな時間におはなしを楽しんでいたようです。

『隊商』
ウィルヘルム・ハウフ　著　塩谷　太郎　訳　偕成社文庫　ハウフ童話全集１
714 円　読物
＜お勧め年齢＞
幼稚園☆☆☆　小低学年☆☆☆　小中学年★★☆　小高学年★★★　中学生★☆☆
高校☆☆☆　一般☆☆☆
（★が多い年齢の子どもにお勧めです。）
＜本の紹介＞
さばくをとおっていた大きな隊商に一人の男が近づいてきました。その男は総理大臣のおいだといって旅の仲間に入れてくれとたのみます。隊商をひきいていた５人の商人たちはこころよく彼をむかえいれ一緒に旅をつづけました。すると、男は旅の休憩で隊商が休むたびにたいくつしのぎに一人ずつはなしをしようといいだしました。そして、それぞれがはなしをすることになります。それは、「コウノトリになったカリフの話」にはじまり、「ゆうれい船の話」「切られた手の話」とつづき、６人がはなし終わったころ、隊商は目的地につきました。そこでみんなは別れをつげますが、商人のひとりは謎の男を昼食にまねきます。その男を気に入ったからです。ですが、昼食に姿をあらわしたその男は自分の秘密を商人にはなしはじめるのです。

＜子どもに手渡すときのポイント＞
一つのわくとなる物語の中に、いくつかの話がはめこまれ、それが全体として複雑にからみあうというハウフ特有のやり方で書かれた物語は読み始めると最後まで読み手をひきつけてやみません。また、一つ一つの話がミステリアスで、ちょっと怖くて、体裁は昔話風ですが、小さいお子さんよりも高学年の子の方が充分に楽しめる本といえるでしょう。
自分で読んでもいいですし、一話ずつ読んであげても楽しめます。
偕成社文庫では全３巻のシリーズとなっていますが、福音館書店からは『冷たい心臓』という題名で１冊にまとめて出版されています。また、童話集の中の１篇『鼻のこびと』にツヴェルガーが絵をつけた本も太平社から出ていますので、気に入った人にはこれらの本も紹介してみるのもいいかもしれません。

このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。　　子ども図書館　重村　さやか